

看護師であつた曾祖母は、第二次世界大戦	クを受けた。	験があつたのかと思ひ知らされ驚き、シヨツ	い曾祖母の心の中にこんなにつらい葛藤や体	たことを書いた手記を初めて読み、あの優し	しかし、私は今回、曾祖母が満州で体験し	先するような謙虚な人だったからだ。	れて、自分のことよりもいつも人のことを優	つ会つてもにこにこした笑顔で話しかけてく	だった頃は、一年に一回ほど会つており、い	曾祖母は五年程前に亡くなつたが、まだ元気	なにつらい体験をしたとは考えもしなかつた	その時は、あの優しく穏やかな曾祖母があん	たんだよ。」という話をされたことがあつた。	的に逃げ帰つてきてたくさんつらい思いをし	ひいおばあちゃんは戦争中、満州にいて奇跡	曾祖母のことである。小学生の頃、母から一	私が平和と聞いて真つ先に思ひ浮かぶのは	―曾祖母の手記を読んで―	平和について思うこと
---------------------	--------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	-------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	-----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	--------------	------------

中に自ら従軍の看護師を志願し、曾祖父と一緒に満州に渡って生活をしてきた。終戦直後から曾祖父とはぐれ、ソ連兵に追われ全財産を没収され、着のみ着のまま収容所を転々として生き延びた。その間には、初めて生まれただ自分の子供を亡くし、一緒に逃げた多くの仲間も亡くし、生きるか死ぬかの生活を送ってきた。本当に一日一日が命がけで、最初の子供を亡くした悲しみに打ち拉がれても苦しんでいる人々を目のあたりにして看護師として何もできない自分がつらい、この憤りをどこにぶつけなければいいのかという苦しみを抱えていたようだ。ようやく日本に戻れたのは終戦から九ヶ月経っており、さらに曾祖父がその翌年にシベリアから帰国してやっと本当の平和の第一歩が踏み出した。手記を読み終えて、曾祖母の心の強さ、平和への懇願を強く感じた。今、当たり前のように三食ご飯を食べ、毎日学校に生き、勉強をしたり、部活や趣味を楽しんだりできるの

は当たり前ではないということ。曾祖母は戦争で苦しんだ人々。曾祖母は、戦争の悲しく恐ろしい事実を知って、平和の尊さを知ることができて本当によかった。曾祖母は、曾祖父が亡くなった後、再び旧満州の地を訪れており、自分の子供や仲間が亡くなった土地を訪問している。その時に、中国側からはとても好意的な歓待を受け、曾

